

# 子供の頃の思い出

西野 勇

私達の住む精華町は旧の狛田、稲田、祝園、山田荘の四地区からなり、西に山あり東に川があるなど起伏にとんだ地形で、町の東を流れる木津川は南より北に流れている。

古来、奈良、恭仁、京都と都に近く、良く発展していた処である。それは、記紀等の史書にも地名などが記載されていることでも証明されている。

こうした広大で水量の豊かな木津川（泉川）には、古来より帆かけ船、筏などの水運の往来が盛んで、川向かいには上狛の高麗寺、大塚山古墳等、南には吐師、また、北には下狛があり下狛廃寺等、渡来集団の定住・往来や都人の行き来もあつた地と考えられる。

祝園地区は現在の木津川に沿った西北・東・中・南・菅井地区で、昔の広大な木津川の中州ではなかったかと思うのである。西北地区には島ノ前と云う小



開橋と木津川

字名も残っている。

昔は菅井の浜、滝ノ鼻の浜があったようで、また、祝園の浜には開きの渡しがあり、古く人々の往来が盛んであったことと推察する。

私（大正十一年生）の子供の頃（昭和初期）には、帆かけ船、筏の往来が盛んであり、木津川の堤防も低く、帆かけ船が通ると帆の上部が堤防の上に見え子供等はその帆かけ船や筏とかけっこをして遊んだものである。

当時の木津川は柳の大木が茂り、芒が二メートル以上にも伸びて、水量が多く水の流れは蛇行して、護岸のため水際には多くの杭が打ち並んでいた。柳の根方や護岸杭の間を棲み家として、鯉、鮒、鯰、鰻、スッポンなど魚の種類や棲息する数も大変多かった。岸边より魚影が良く見え、美しく清く澄んだ木津川であった。

そうした木津川は私等子供達の良き遊び場でもあった。

春には柳の芽枝を取って活け、蓬をつんで蓬餅を作ってもらったり、木津川では柳の少し太い枝を切って刀や鉄砲を作りチャンバラごっこ、兵隊ごっこをして遊んだ。

夏には上級生の指導で水泳の練習をしたり、柳の根方、護岸杭の間を

棲み家としている魚を手で捕み取りをして家に持ち帰り、焼いたり、煮たりして食膳を賑やかにした。また、川原を掘って池を作り、そこへ小魚を追い込み、疲れると柳の木の下で昼寝をした。夕方になれば小川で泥鰌を取って置き、笹竹を一〜一・五メートルに切った竿を作り、竿の先に尻糸を（これも一〜一・五メートルに切ったもの）括り付け、もう一方の先に鯛針を付け、その鯛針に取っておいた泥鰌を刺して、これを夜になると木津川に持つて行った。魚のいそうな処に一本ずつ仕掛け（竿を岸に刺し流れないように固定して、糸は川の中で自然に流しておく）ておくのである。これを夜ぶりとっていた。翌朝早くしかけをとりに行くと、鰻、鯉、鮒の大きいのが掛かっていた。

秋には木津川の芒の茂みで遊び、芒の軸を取ってチャンバラごっこ、兵隊ごっこをして遊び、中秋の名月には芒の穂を取って家に持ち帰り、一升ビンに活け、里芋、餅などを入れた雑煮を月に供えて名月を祭った。子供等は各家々の供物を人に見つからないようにその供物を取っていた。供物を取って食べると病気になるともいわれていた。

月が中天に上る頃、家族揃って（女性と子供が主）木津川へ行き、渚で月を拝み川に入り、川の水で目を洗うと目が良く見えるようになる、顔を洗うと顔が美しくなるといわれていた。これはよく実行されていた。

冬には柳の枝、芒の軸等を取ってやはりチャンバラごっこ、兵隊ごっこ、そして相撲等をして遊んだ。

当時は木津川の堤防、川原は子供の良き遊び場所であった。

現在とは違って塾があるわけでもなく、子供達は自然と共に遊び体力をつけ、自然を愛し伸びのびと学んだ。

また、一方では精華町史編纂参考資料版二『写真で見る暮らしと風景』の十三ページの写真「一千年後の川西市」というような夢も描いていた。(これは私の小学校五年生の夏休みに級友達皆で考えた宿題であった) 一千年はるか当時より五十年ばかりで小学生の描いた夢が学研都市として実現しようとしているのには驚くばかりである。

前述の行事のうち残っているのは中秋の名月の日に子供達が供物を取りに廻るぐらいで、それさえも供物は袋入りのお菓子と変わり風情がなくなった。

昭和十年頃より木津川の改修工事が行われ、柳の大木も姿を消し芒も少なくなり、護岸杭は石積と変わって現在の風景となっている。この河川改修で伊勢湾台風のとき木津川の水が堤防の上を超えていたが一瞬のことで難を免れたことを覚えている。

昭和二十二年頃までは渡しがあったが、その後、流れ橋(雨が降り川の水嵩



今は無い流れ橋

が増加すると自然に橋は流れる）へと変わって行った。しかし、この橋は夏より秋の増水期には流れ、早くても冬にならないと復旧出来ず、春まで待つこともあった。ときには渡し舟が復活されたこともあり、大変に不便であった。余談ではあるが、この橋を時代劇映画のロケーションでよく利用されていたのを覚えている。

昭和四十七年三月「開橋」として立派な橋が架けられ、現在は国道二十四号による京都、奈良、和歌山、そして大阪へと、陸運の中間地点とし、生活に欠かせない橋となっている。

古来より水運を中心として注目され、近・現代では陸運の重要な地域として益々発展を見せる我が郷土、精華町。古きを知り、そして、学ぶことから学研都市づくりの第一歩が始まると信じて、自分の子供の頃を回顧してみた。